

# 無生戒の受戒儀について

任 圓 映

## はじめに

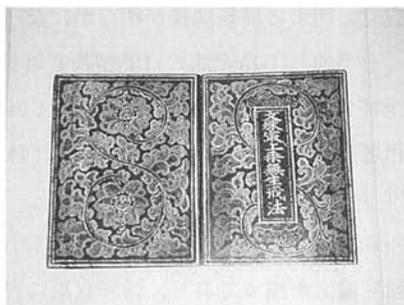
仏教において戒律問題は、極めて実践的な課題といえる。そのため、戒律をどのように受け止めるかについての意見も様々である。その結果、戒律問題は、長い歴史の上でその見方が変わるようになり、ついに止悪行善を基本とする戒の精神を重要視する傾向を持つようになった。そして、それが明確に表れるのが、受戒儀式においてである。

別稿<sup>1)</sup>において、大乘菩薩戒の特徴の一つである自誓受戒について検討したところ、禅思想と戒の精神を契合させようとしたものが見つけられた。いわゆる、<sup>2)</sup>無生戒と呼ばれる戒である。それを本稿において紹介する。

無生戒が端的に見られるのは、韓国で発見された『文殊師利菩薩無生戒經』(宝物文化財738号、通度寺聖宝博物館保管、以下『無生戒經』)と「文殊最上乘無生



[無生戒經]



[無生戒牒]

戒法] (海印寺博物館保管, 以下「無生戒牒」) である。本稿では無生戒の受戒儀を把握するため、「無生戒牒」を取り扱って考察する。そして、無生戒を広く流布させた指空 (?-1363) の足跡を辿り、歴史的な背景を眺める。その上「無生戒牒」を紹介し、受戒儀の内容を通じてその思想的背景を論及していくことにする。

### 無生戒に関する従来の研究

本題に移る前に、まず無生戒に関する従来研究成果について述べておく。

無生戒の資料となる『無生戒経』と「無生戒牒」は、韓国で発見された貴重本である。そのため、今までの研究は、韓国を中心に行われてきた。但し、それらの研究は、無生戒の研究というより、無生戒を普及させた指空という人物の研究が主としてなされ、無生戒の研究については、ほとんど注意が向けられてこなかった。

先行研究の中で注目すべき成果としては、許興植の『高麗로 옮긴 印度의 등불——指空禪賢—— (The Light of Indian Buddhism Transformed in Medieval Korea)』が挙げられる。これは、指空研究の先駆者である許興植が、1997年までの研究成果を纏めたものである。そこには、指空の生涯や著作、思想などが記されている。特に注目を引くのは、現在まで発見された四つの「無生戒牒」(妙徳戒牒、懶翁戒牒、瑚林本戒牒、覺慶戒牒<sup>3)</sup>) の書誌学的な研究が行われ、戒牒成立に関する前後関係が明らかになったことである。

その他、中島志郎の『梵僧指空의 研究』, 이병욱 (Lee, Boung-Wook) の「指空화상 禪사상의 특색 (A Study on Character of Ji-Gong's Zen Buddhism) —— 『六祖壇經』과 비교를 통해서<sup>4)</sup>」, 河廷龍の「『西天提納薄陀尊者浮屠銘并序』에 대한 一考察 (A Proofreading, Translation & Commentary on Ji-Gong's Epitaph<sup>5)</sup>」などがある。さらに、『韓国仏教学叢書』123巻には、指空に関する研究論文が揃っており、情報収集に容易である。<sup>6)</sup>

中島志郎の論文は、氏が留学時代に書いたものであるが、これをきっかけに

指空の研究が活発になったと言っても過言ではない。氏は、指空の『禅要録』を分析し、その思想として、空観に基づいた三学観について論及したのである。そして이병욱 (Lee, Boung-Wook) は、指空の禅思想と戒の実践観が、真空無相にもとづいていることを指摘している。また、河廷龍は、碑文の異本対照を行い、原文の資料価値を高く評価している。指空の生涯については、以上の論文を通して詳しく知ることができる。

最近になり指空の研究は、한성자 (Han, Sung-Ja) によって新しい展開を迎えるようになった。한성자는、「다라니를 통해 본 지공화상의 밀교적 색채」(The esoteric Aspects of Chi-Gong's Thoughts)<sup>7)</sup> 『文殊師利菩薩無生戒經』을 통해 본 지공화상의 밀교적 색채』(『文殊師利菩薩無生戒經』における指空和尚の密教的な特徴)<sup>8)</sup> という、二つの論文において指空の密教的な性格を検討し、密教の戒と無生戒に示されている菩薩修行が一致していることを証明したのである。

一方、日本では1994年から1995年にかけて指空の事蹟に関する共同研究がなされ、龍谷大学『仏教文化研究所紀要』(33号/1994, 34号/1995)に、二回に分けて記載された。北村高を主任とするこの研究では、指空の碑文や『朝鮮仏教通史』などを引用し、指空のインドにおける活動を詳細に考察する作業を行なったのである。これは、指空が生存していたとされる14世紀インドの状況を把握しようとしたもので、その時代背景が容易に理解できる。

1997年からは中国側の参加もあり、[韓中学術大会]<sup>9)</sup> が開催され、指空を巡って活発に研究が行なわれた。特にその学会では、指空のインドにおける行跡を中心に議論されたのである。その時、発表された論文は韓国で翻訳され、『三大和尚研究論文集』<sup>10)</sup> に載せられている。

ここまで研究史を述べてきたが、上述のように、無生戒より無生戒を受けた指空に関する研究が遥かに多いことが分かる。無生戒は、韓国、日本、中国の大蔵経の目録にも見当たらないため、文献より人物の研究が先行されたと考えられる。では、以上の研究成果を踏まえながら、無生戒について考察を始めよう。

## 1 無生戒の普及と指空の足跡

従来の研究成果をとおして分かるように、無生戒の研究において指空は、欠かせない存在である。その指空の生涯については様々な研究がなされているが、それにもかかわらず、未だ生没年代は明確ではない。<sup>11)</sup>指空の行跡が残されている記録としては、次のようなものがある。

- (1) 1926年、閔漬 撰、「指空禅要録」、生存時記録
  - A. ソウル大学図書館本
  - B. 東国大学図書館本
- (2) 1951年、白雲 述、「辛卯年上指空和尚頌」、生存時記録
  - A. 『韓国仏教全書』巻6, pp. 659-660
- (3) 1378年、李穡 撰、「西天提納薄陀尊者浮屠銘并序」死後記録
  - A. T51.982c-985c
  - B. 『朝鮮金石総覧』上, pp. 1283-1289
  - C. 『朝鮮仏教通史』上, pp. 353-361, 〈李能和本〉
  - D. 『退耕堂全書』巻6, pp. 353-361, 〈權相老本〉
  - E. 『大日本仏教全書』116, pp. 419-425

ここでは幾つかの異本が残されている(3)李穡の碑文を中心に眺めていく。

指空(Sūnyqdiya, 禅賢)は、14世紀前半に中国の元、韓国の高麗(918-1391)を訪れ、高麗仏教界に大きな影響を与えた人物である。記録によると、指空はインドの王子として生まれ、ナーランダ寺で修学することになる。八歳の時、出家した指空は、ナーランダの律賢(Vinaya-bhadra)から五戒を受け、般若を学んだ。その時、指空は律賢に「諸仏と衆生と虚空の境界が何か」と訊ね、律賢から「有でもない、非でもない、真般若がそれである」という答えを得たという。<sup>12)</sup>後から見ると、この問答は指空の生涯において思想的な基盤となる重要なエピソードであることがわかる。なぜなら、本稿で紹介する無生戒こそ、般若思想に基づいているからである。つまり、指空の般若思想は、律賢からの影響があったと考えられる。<sup>13)</sup>

その後、指空は普明 (Samanta - Prabhāsa) の所へ行き、印可を受けた。19歳の時である。そこで、初めて指空と呼ばれ (以前までは禪賢と呼ばれていた)、衆生を教化するように命じられた。指空の長い旅はそこから始まるのである。彼は、チベットに至るまで21カ国に立ち寄り、様々な民族や宗教に関する貴重な資料を残した。<sup>14)</sup>そして、元を経て1326年3月に高麗に入り、1328年9月まで滞在した。高麗に入ってきた指空は、安居を成し、安居が終わると遊行した。その指空の高麗における行跡の中で、何よりも目立つのは、戒壇を設置し、多くの人々に無生戒を授けたことである。指空の『禪要録』には、無生戒を受けるために、王族はもちろん一般人に至るまで、一日およそ千人万人にも及んだと記されている。<sup>15)</sup>

ところで、無生戒は律のように諸悪莫作を強調する戒条がないのが特徴である。しかし、当時指空から無生戒を受けた人々は、飲酒、肉食を断じ、なおかつ悪い風俗までなくなったと『高麗史』は書き記している。<sup>16)</sup>それほど無生戒の影響力は大きかったのである。

では、無生戒には具体的にどのような特色があるのだろうか。「無生戒牒」および無生戒の内容について検討してみよう。

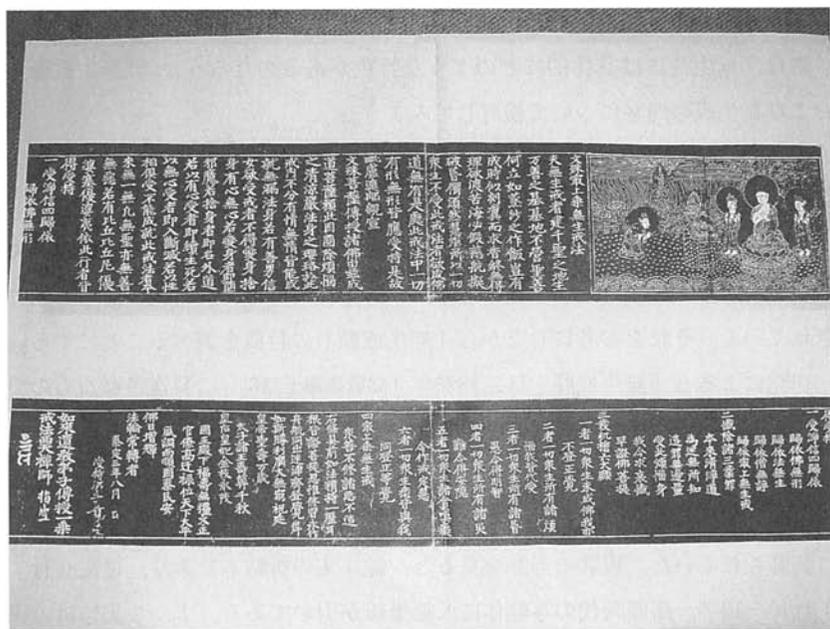
## 2 「無生戒牒」について

「無生戒牒」は、1992年海印寺の金銅毘盧遮那仏から発見された腹蔵遺物の一つである。その腹蔵遺物に関しては、1997年発刊された資料集に詳しく紹介されている。<sup>17)</sup>それを参考にしながら「無生戒牒」の特徴を調べることにする。

刊記によると「無生戒牒」は、1326年 (高麗忠肅王13年) に製作されたものである。紺紙金泥で書かれており、サイズは縦8.3cm 横6.4cm である。また、五色 (青、黄、赤、白、紺青) の布で作られた縦14cm 横8cm の小袋があり、その中に「無生戒牒」が入っていた。そして表紙には、金銀泥の宝相華文が綺麗に装飾されていた。戒牒の形態を見ると、総16丈の折帖本であり、毎丈6行、1行10—12字、高麗時代の写経体に天地単線が引いてある。1、2丈には、繊細な変相図が描かれており、蓮華座の上に仏菩薩を登場させる構図である。仏

菩薩の前にはテーブルがあり、その上には供養物などが置いてある。その前に正座をし、合掌している者がいるが、帽子を被っている姿から見て、この人が指空であると判断される<sup>18)</sup>。

サイズから見て「無生戒牒」は、小さくて普段の携帯用として作られたものである。また、受戒者の正確な名前が残っていることから、無生戒を受けた誰かが仏像を作る時に、自分の物を腹藏品として差し入れたと考えられる<sup>19)</sup>。特に、ここで注目すべきことは、「無生戒牒」が腹藏品として発見されたということである。一般的に腹藏品として発見されるものには、『法華経』、『華嚴経』、『金剛経』などの經典が多い。しかし、海印寺の毘盧遮那仏の腹蔵からは、「無生戒牒」と信者のものと見られる服装が幾つか発見されただけである。つまり、經典の代わりに「無生戒牒」があったわけである。戒牒が腹蔵遺品として発見されたことから、戒律がその時代に重要な課題であったことが窺える。さらに、その戒牒が無生戒であったことは、毘盧遮那仏が造られた高麗時代に



[無生戒牒]

はすでに無生戒が普及されていたことを示す明確な証拠といえる。尚且つ、朝鮮半島を体表する海印寺で、発見されたことについても注目すべきであろう。

次は、復元した原文の内容を紹介する。

原文	現代語訳
<p>文殊最上乘無生戒法 夫無生戒者、建千聖之地、生萬善之基。基地不營、聖善何立。如蒸沙之作飯、豈有成時。似刻糞而求香、終無得理。欲渡苦海、必假慈航、擬破昏衢、須然慧炬。所以一切衆生、不受此戒法者、欲成佛道、無有是處。此戒法中、一切有形無形、皆應受持。是故毘盧遮那親宣、 文殊菩薩傳授、諸佛由茲成道。菩薩類此、因圓除煩惱之清涼、嚴法身地瓔珞。於此戒內、不分有情無情、皆能成就無漏法身。若有善男信女、欲受戒者、不得愛身・捨身・有心・無心。若愛身者、即墮邪魔、若捨身者、即名外道、若以有心受者、即續生死、若以無心受者、即入斷滅、若以性相俱受、不能成就。此戒法者、本來無一、無凡無聖、亦無善無惡。若有比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、依此行者、皆得受持。</p> <p>一受淨信四歸依。 歸依佛無形。 歸依法無生。 歸依僧無諍。 歸依最上無生戒。</p> <p>二懺除諸三業罪。 本來清淨道、 早證佛菩提。</p>	<p>文殊最上乘無生戒法 無生戒は千聖を建てる地であり、萬善を生み出す基である。基地を営まないで、聖が立つだろうか。これはまるで沙を蒸してご飯を作るようなものである。どうして成す時があるのだろうか。糞を刻んで香を求めようであって、決して理を得ることはない。苦海を渡ろうとすれば、必ず慈悲の航船を借り、暗い道を明かそうとすれば、智慧の灯を燃やすべきである。一切衆生がこの戒法を受けなければ、佛道を成就しようとしても得るものがない。この戒法中では、一切の有形無形といったすべてが應に受持すべきである。その故、毘盧遮那が自ら説いて、文殊菩薩が傳授させ、諸仏がこれによって成道したのである。菩薩はこれを頼りにし、それによってあまねく煩惱を除いて清涼となり、法身地を瓔珞によって莊嚴したのである。</p> <p>この戒の内では、有情無情を分けず皆能く無漏法身を成就する。若し善男信女がいて、受戒したいと思ったならば、愛身・捨身・有心・無心を得ることはない。若し愛身者ならば、即ち邪魔に墮ち、若し捨身者ならば、即ち外道と名づけられ、若し有心を持って受戒したならば、即ち生死が続く、若し無心を持って受戒したならば、即ち断滅に入り、若し性相を共に受戒すれば、成就することは出来ない。この戒法は本来一つではない、凡でもない聖でもない、また善でもない悪でもない。若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷がいて、これ（戒）によって修行するならば、皆受持することができる。</p> <p>一つ目は、清らかな信心を持って四歸依を受けることである。</p> <p>無形の仏に歸依します。 無生の法に歸依します。 無諍の僧に歸依します。</p>

為迷無所知。  
造罪無邊量、  
受此煩惱身。  
我今求哀憐、  
早證菩提。

### 三、發弘誓六大願。

- 一者、一切衆生未成佛、我亦不登正覺。  
二者、一切衆生、所有諸煩惱、我皆代受。  
三者、一切衆生、所有諸昏愚、令得明智。  
四者、一切衆生、所有諸災難、令得安隱。  
五者、一切衆生、諸貪嗔痴、令作戒定慧。  
六者、一切衆生、悉皆與我、同登正等覺。

### 四、最上乘無生戒。

衆善不修、諸惡不造。

右條具前、如法精持、一歷耳根、皆證菩提、思惟修習、永作舟航、同出迷津、齊登覺岸。如斯勝利、廣大無窮。祝延皇帝聖壽萬歲、太子諸王壽筭千秋、皇后皇妃金枝永茂、國王殿下、福壽無疆、文武官僚、高遷綠位、天下大平、風調雨順、國泰民安、佛日增輝、法輪常轉者

泰定三年八月 日

受戒弟子覺慶

如來遺教弟子傳授一乘戒法

西天禪師 指空

最上無生戒に帰依します。

二つ目は、諸の三業罪を懺除することである。

本来清浄なる道は、迷妄であるために知らず、無邊量の罪を造り、煩惱の身を受けました。私は今哀れんで懺悔を求め、速やかに仏菩提を證得したいと思います。

三つ目は、六つの大誓願を起こすことである。

一は、一切衆生が成仏しなければ、私は正覺に登りません。

二は、一切衆生のあらゆる煩惱を我が皆代りに受けます。

三は、一切衆生のあらゆる昏愚を明智にさせます。

四は、一切衆生のあらゆる災難を安隱にさせます。

五は、一切衆生の貪嗔痴を戒定慧に作り変えさせます。

六は、一切衆生を皆私と同じ正等覺に登らせます。

四つ目は、最上乘無生戒である。

衆善を修めず、諸悪も造りません。

以上の条項を備えて進み正しく精持すれば、一度耳根に入ると皆菩提を得、思惟し修習すれば、永く船で渡航し、共に迷津から出て齊しく覺岸に登る。このような勝利は、廣大であり、無窮である。

祝延します。皇帝の聖寿が万歳になるように、太子諸王の寿命も千寿になるように、皇后皇妃の金枝玉葉が永く茂るように、國王殿下の福と寿命が無窮し、文武官僚は高い地位になるように、

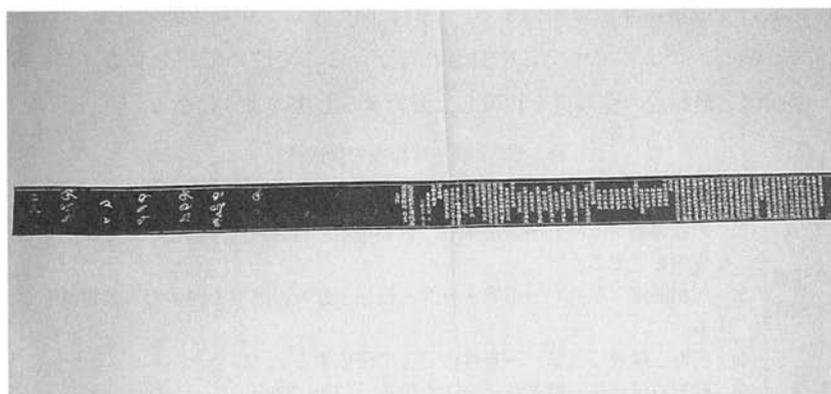
天下が大平し、風雨は順調になるように、国家は泰平し、人民が平安するように、仏の智慧はさらに輝き、法輪が常に伝えられるように。

泰定三年八月 日 受持弟子覺慶

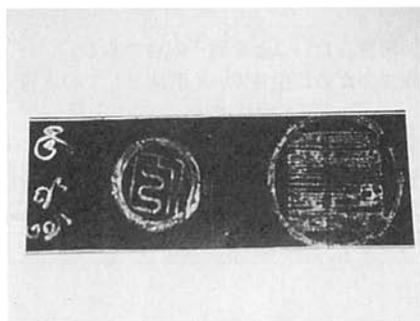
如來遺教弟子傳授一乘戒法

西天禪師 指空

「無生成牒」本文の最後には、1326年（泰定三年八月）受持弟子覚慶と書いてある。そして、如来遺教弟子傳授一乘戒法、西天禪師と書いており、指空の署名がある。この筆跡は、指空本人の直筆であると考えられる。なぜなら、この「無生成牒」は指空が高麗に滞在していた間（1326年3月—1328年8月）に製作されたものであり、また、本文の書体と違う文字で書かれているためである。指空の署名の後には、落款が金泥で押されており、梵文が書いてある。梵文の内容については鑑定できないが、指空が書いたものとは考えられない。



【無生成牒 全体模様】



【落款】

この「無生成牒」の内容は『無生成戒経』に基づいており。『無生成戒経』は「無生成牒」とともに高麗をとおして初めて伝えられたものである。『無生成戒経』は指空訳となっているが、原本は見当たらず、3巻の漢本のみ伝わっている。最近の研究では、『無生成戒経』が密教的な要素を持ちながらも、般若経系統の経典として

評価されている。<sup>20)</sup> その『無生成戒経』と「無生成牒」はほぼ一致している部分<sup>21)</sup>があり、『無生成戒経』の重要な部分だけを抜粋して「無生成牒」を作成したこと

が確認できる。では、「無生戒牒」の受戒儀を検討し、無生戒に含まれている思想について考察する。

### 3 無生戒の受戒儀について

従来の受戒儀式は、仏教徒の入門儀式として複雑に見える面がある。これに対して、無生戒の受戒儀は簡潔である。帰依を終え懺悔をし、誓願を立てて戒を受けるという順序になっている。この構造は、敦煌本『六祖壇経』における無相戒の受戒儀に非常に類似する。これに関しては、中島志郎と이명욱 (Lee, Boung-Wook) によってすでに検討されたが<sup>22)</sup>、ここで改めて紹介する。無生戒の受戒儀と無相戒の受戒儀を比較し、要約すると次のようになる。

表 [無生戒と無相戒の受戒儀]

無相戒 受戒儀	(1) 帰依自三身仏 (三昌) → 法身・化身・報身の自性三身仏に帰依する。 (2) 四弘誓願 (三昌) → 自心衆生, 自心煩惱, 自性法門, 自性仏道を前提として誓願を立てる。 (3) 無相懺悔 (三昌) → 前念・今念・後念・念々の悪業を消すため無相懺悔をする。 (4) 自性三帰戒 (三昌) → 自性の三宝に帰依する。 (5) 般若波羅密法 → 般若波羅密法を得る。(T48.339b)
無生戒 受戒儀	(1) 四歸依 → 三歸依 (歸依佛無形。歸依法無生。歸依僧無諍) に無生戒が追加された形である。 (2) 懺悔 → 身・口・意の三業を消し, 解脱したいことを願う内容である。 (3) 誓願 → 六つがあり, 何れも一切衆生のために生きていく菩薩としての大誓願である。 ①一切衆生未成佛, 我亦不登正覺。②一切衆生, 所有諸煩惱, 我皆代受。 ③一切衆生, 所有諸昏愚, 令得明智。④一切衆生, 所有諸災難, 令得安隱。 ⑤一切衆生, 諸貪嗔痴, 令作戒定慧。⑥一切衆生, 悉皆與我, 同登正等覺。 (4) 最上乘無生戒 → 衆善不修, 諸惡不造。

表のように無生戒の受戒儀は、大きく分けて (1) 四歸依 (2) 懺悔 (3) 誓願 (4) 最上乘無生戒の4つの手順になっている。それを説明すると、まず(1) 四歸依は、三歸依に無生戒が追加された形で、無形の仏、無生の法、無諍の僧に帰依することである。無形の仏は法身を、無生の法は無生法忍を、無諍の僧は和

合僧伽を指す。この三宝に無生戒を加えて四歸依になるのである。三宝に無生戒を加えたのは、無生戒の価値を高く評価し、位置づけるためであると考えられる。一方、無相戒の受戒儀では、法身・化身・報身の自性三身仏に帰依する帰依自三身仏を説く。柳田聖山は、敦煌本『六祖壇経』の受戒儀の特徴がここにあると強調する。つまり、三身を自らの法身に帰一させるのである。さらに、菩薩としての受戒を単純に禅の立場で統一させようとしたのが、慧能の無相戒であると特徴づけている。<sup>23)</sup>

(2) 三業の懺悔は、大乘戒の受戒儀式ではよく見られる場面である。懺悔を通して身・口・意の三業を浄化させるのは、業障に障れることなく修行に進み、仏菩提を得るためである。これに対して、無相戒の受戒儀では、誓願と懺悔の順序が変わっており、意業を消すための無相懺悔<sup>24)</sup>を説く。無相戒や無生戒は、戒の精神を強調する自誓受戒に類似しているが、『梵網経』の自誓受戒では懺悔した後、誓願を立てるように説かれて<sup>25)</sup>いる。無生戒の受戒儀が『梵網経』の自誓受戒に従っていることが分かる。

(3) 無生戒の誓願には、一切衆生のために生きていく菩薩としての大誓願が具体的に述べられている。衆生済度という行為は、菩薩の実践修行であるから、菩薩道の誓願が広がるほど成仏道に近づくことになる。しかし、無相戒では自性を前提とする四弘誓願を立てている。表[無生戒と無相戒の受戒儀]で分かるように、敦煌本『六祖壇経』の無相戒はすべて自性清浄心に基づいて説かれている。つまり、無生戒と無相戒は、自性清浄心に辿り着く為の方便と言える。特に、無生戒では善悪の混乱から離れ、両方とも否定する方法を用いて自性清浄心に回帰させるという展開を示している。

(4) 最上乘無生戒には「衆善不修，諸惡不造」という極めて急進的な戒が提示されている。これは守るべき戒律とは言えない。禁戒の性格を全く持っていないからである。手短にいえば、戒律の実践徳目を否定しているのである。

敦煌本『六祖壇経』の無相戒では自性清浄心に基づいた自性三帰戒を説いているが、その他、徳異本(1290)と宗宝本(1291)『六祖壇経』には、無生戒のように「不思議、不思議」という革新的な内容が主唱<sup>26)</sup>されている。『慧能研究』

の五本対照本から検討してみると、慧明が慧能に法を求める場面において「不思議、不思議」が説かれている。これは徳異本と宗宝本のみ確認できる。いずれも勸善ではなく、善悪から離れるという内容である。したがって、無生戒と無相戒が同じ思想に基づいて成立されたことが十分に考えられるのである。

さて、「無生戒牒」では、無生戒を受戒するために、愛身・捨身・有心・無心を持ってはいけないと述べている。なぜなら、愛身すれば、邪魔に墮ちることになり、捨身すれば、外道となる。また、有心を持って受戒したら生死が続き、無心を持って受戒したら断滅に入るからである。つまり、無生戒を正しく受けるためには、中道を守らなければならない。肉体と精神が、相互対立する極端な立場にとどまることを無生戒は警戒するのである。なお、『無生戒経』では、無生戒が無生法忍であると説く。『無生戒経』から簡単な例を引くと、「無生戒とは、諸世尊一切如来の無生法忍である<sup>27)</sup>」という表現がある。それが「無生戒牒」には、「本来無一、無凡、無聖、無善、無悪が無生戒である」と説かれている。いわゆる、般若否定の論法を用いて無生戒を強調するのである。これもまた中道の教えであり、凡と聖、善と悪を対称して説明のするである。あらゆる物事を把握し実践する時に、偏る見方をしてはいけないことを説くのである。このように、無生戒の背景には、般若思想や中道の意味が含まれている。

ところが、戒律に関する認識の変化をもたらした無相戒および無生戒の典拠は、『諸法無行経<sup>28)</sup>』から探ることができる。『諸法無行経』は、般若の立場において戒律を否定し、大乘究極の中道実相を説き示す經典である。内容面においては、まず下記のAのように般若思想に見られる否定の論法を使って空観を説く。そして、淨威儀菩薩<sup>29)</sup>の物語を紹介し、衆生教化のためなら形式的な戒律には縛られなくてもよいと説く。つまり、菩薩の行為は、衆生教化のみと強調するのである。

- A. 無空無無相……無生無無生、無滅無往來。<sup>30)</sup>
- B. 若菩薩見一切衆生即是涅槃性。則能畢滅業障之罪。<sup>31)</sup>
- C. 見一切善不善法、虚誑不實、如幻如夢、如影如響如焰。<sup>32)</sup>

Bは、仏が文殊菩薩に業障を消す法を説く場面である。一切衆生に涅槃性が

あることを知ると、業障がなくなることを説く。Cは、善不善法を区別することは、無常なことであるとし、さまざまな比喩を挙げている。つまり、戒律の形式的な面を否定し、善悪の分別を警戒する立場を取っている。この『諸法無行経』は、『六祖壇経』においては徳異本(1290)と宗宝本(1291)の「不思議、不思議」へ、さらに「無生戒牒」(1326)の「衆善不修、諸悪不造」へと繋がる。日本では、最澄(767-822)の『顕戒論』(820)に引用され、大乘仏教戒壇の設立に重要な典拠となったのである。

では、なぜ指空は、このような戒を高麗の人々に授けたのか。指空の『禪要録』には、次のように語られている。

師(指空)云う、戒とは、凡でもない聖でもない。性でもない、相でもない、有でもない無でもない。また、身でも心でもない。善でも悪でもない。これが即ち戒である。……師云う、もし善を修めれば、人天の果を受けることになり、もし悪を犯すと、輪廻の報に墮ちることになる。それ故、<sup>33)</sup>善悪の二途は、道法の實理ではない。『禪要録』

善は人天に、悪は輪廻に果を残すため、両方とも道法の實理ではないというのが、指空の教えである。「無生戒牒」のように、六道輪廻を否定し、そこから離れることが本当の目的であると指空は説明する。つまり、善からも悪からも離れることが無生戒を受けることと同じであり、無生法忍を得て、自性清浄心に回帰することとなる。そしてこれが無生戒の最終目的になるのである。

このような無生戒を指空が高麗において強調したのは、高麗仏教界の混乱に、その問題があったと考えられる。鄭濟奎は『高麗後期在家佛教信仰研究』において、高麗の時代状況を次のように述べている。

このように、高麗後期の仏教界は、すでに多くの問題点を抱えていた。従って、この時期には、仏教の政治的な影響力はもちろん、宗教信仰としての役割も自然に縮小された。しかし、修禪社、白蓮社などの信仰結社を始め、現実克服の努力が着実に続けられた。当時の高僧大徳たちは、大変な時期を乗り越えるため、新しい思想を強調したのであり、これを在家信者たちが受容しながら問題点を解決していったのである。<sup>34)</sup>

仏法の混乱は、戒律の混乱から生じる。このように、高麗末期の仏教界が沈滞しており、僧侶たちは混乱の時期を乗り越えるため、新しい思想を取り上げ強調するようになった。その時、高麗に滞在していた指空も、それに加えて新しい提案として無生戒を提示したと考えられる。慧能(638-713)が無相戒を用いて新しい思想を提示したように、最澄(767-822)が日本で大乘戒のみによって授戒したように、指空(?-1363)は、高麗において無生戒を提示し、時代的な混乱を克服するために努力していたのである。

## おわりに

以上、無生戒の受戒儀を把握するため、海印寺で発見された「無生戒牒」を用いて検討を行った。そして、無生戒を広く流布させた指空の足跡と「無生戒牒」を紹介し、受戒儀の内容を通じて思想のもとを論及してきた。その結果をまとめて結論づける。

指空(Sūnyqdiya, 禪賢)は、14世紀前半に中国の元、韓国の高麗を訪れ、仏教界に大きな影響を与えた人物である。指空の行跡の中で重要な点は、戒壇を設置し、多くの人々に無生戒を授けたことである。その無生戒は『無生戒経』に説かれており、その経典の重要な部分だけを抜粋して受戒の時に配ったのが「無生戒牒」である。

無生戒の受戒儀は(1)四歸依(2)懺悔(3)誓願(4)最上乘無生戒の手順になっており、『六祖壇経』の無相戒受戒儀と類似な構造を持っていることが確認された。無生戒は「衆善不修、諸悪不造」であり、それに相当する経句が、徳異本と宗宝本『六祖壇経』の「不思善、不思惡」である。そして、その無生戒の典拠として挙げられるのが『諸法無行経』である。形式的な戒律を否定し、善不善を区別しない『諸法無行経』は、様々な戒経に影響を与えたと思われるが、禪文献においては『六祖壇経』への影響が取り挙げられる。そして、無相戒の影響を受けたのが、本稿で扱った無生戒といえる。

思想面において、無生戒は般若思想や中道の意味が含まれていた。「無生戒

牒」では、般若否定の論法を用いて無生戒を強調しており、偏る見方をしてはいけないことを強調しながら中道思想を説き示している。そして、このような無生戒が高麗で広がったのは、当時仏教界が沈滞しており、活力を与える何かが必要であったためである。その手段として、当时には無生戒が適していたと言えるのである。

#### 〈参考文献および略語〉

- 北村高(1994) 北村高「インド仏教伝播史の研究」(1)(中山正晃, 小玉大圓, 直海玄哲) 共同研究, 龍谷大学『仏教文化研究所紀要』33号, 1994, pp. 104-123
- (1995) 同「インド仏教伝播史の研究」(2)(中山正晃, 小玉大圓, 直海玄哲) 共同研究, 龍谷大学『仏教文化研究所紀要』34号, 1995, pp. 1-20
- 忽滑谷(1930) 忽滑谷快天『朝鮮禪教史』春秋社, 1930, pp. 244-254
- 祁慶富(1996) 祁慶富「指空中国行蹟考」『伽山学報』5号, 1996, pp. 62-95, 『韓国仏教学叢書』123巻, 佛函出版社, 2004, pp. 193-227
- 芳政武(1996) 芳政武『仏教戒律学』北京; 宗教文化出版社, 1996, pp. 345-351
- 金炯佑(1984) 金炯佑「胡僧指空研究」『東國史學』18, 1984, 『韓国仏教学叢書』佛函出版社, 2004, 123巻, pp. 1-24
- 中島志郎(1984) 中島志郎『梵僧指空의 研究』東國大學校 修士論文, 1984
- 段玉明(2001) 段玉明「지공의 인도행적에 대한 고찰」유호선訳, 『三大和尚研究論文集』Ⅲ, 佛泉, 2001, pp. 53-67,
- Lee, Boungh-Wook(1996) 이병욱「指空화상 禪사상의 특색 (A Study on Character of Ji-Gong's Zen Buddhism) ——『六祖壇經』과 비교를 통해서——」『三大和尚研究論文集』I, 1996, pp. 15-49
- 張福(2001) 張福「여러지역을 참방한 梵僧과 羅羅斯의 불교문화」유호선訳, 『三大和尚研究論文集』III, 2001, 佛泉, pp. 37-51
- 河廷龍(1996) 河廷龍「『西天提納薄陀尊者浮屠銘并序』에 대한 一考察 (A Proofreading, Translation & Commentary on Ji-Gong's Epitaph)」『三大和尚研究論文集』I, 佛泉, 1996, pp. 71-99, 『韓国仏教学叢書』123巻, 佛函出版社, 2004, pp. 1-262
- Han, Sung-Ja(2002) 한성자「다라니를 통해 본 지공화상의 밀교적 색채 (The esoteric Aspects of Chi-Gong's Thoughts)」『三大和尚研究論文集』III, 佛泉, 2001, pp. 11-35
- (2002) 同「『文殊師利菩薩無生戒經』을 통해 본 지공화상의 밀교적 색채 (『文殊師利菩薩無生戒經』における指空和尚の密教的な特徴)」『회당학보』7号, 2002, pp. 155-187

- Heo, Heung-Sik (1985) 許興植 「高麗에 남긴 鐵山瓊의 行跡」 『韓國學報』 18号, 동국사학회, 1985, 『韓國仏敎敎學叢書』 佛函出版社, 2004, 123卷, pp. 25-39
- (1988) 同 「지공(指空)의 사상(思想)과 계승자(繼承者)」 『겨레문화』 2, 한국정신문화연구소, 1988, 『韓國仏敎敎學叢書』 佛函出版社, 2004, 123卷, pp. 39-86
- (1989) 同 「指空의 思想形成과 現存著述」 『동방학지』 61, 연세대 국학연구원, 1989 『韓國仏敎敎學叢書』 佛函出版社, 2004, 123卷, pp. 87-118
- (1990) 同 「指空의 仏敎思想과 麗末朝初의 現實性」 『民族史의 展開과 그 文化』 상, 1990 『韓國仏敎敎學叢書』 佛函出版社, 2004, 123卷, pp. 119-142
- (1991) 同 「指空의 無生成牒과 無生成經」 『서지학보』 4, 한국서지학회, 1991 『韓國仏敎敎學叢書』 佛函出版社, 2004, 123卷, pp. 143-154
- (1992) 同 「指空의 原碑文과 碑陰記」 『佛敎와 歷史』 한국불교연구원, 1992 『韓國仏敎敎學叢書』 佛函出版社, 2004, 123卷, pp. 155-174
- (1993) 同 「指空의 『禪要錄』와 禪思想」 『진산한기두박사화갑기념 한국종교사상의 재조명』 원광대출판국, 1993, 『韓國仏敎敎學叢書』 (佛函出版社, 2004) 123, pp. 175-190
- (1996a) 同 「指空研究의 現況과 補完」 『淸溪史學』 12号, 韓國精神文化研究院淸溪史學會, 1996, 『韓國仏敎敎學叢書』 佛函出版社, 2004, 123卷, pp. 227-242
- (1996b) 同 「指空和尚에 관한 資料와 国内外의 研究現況」 (The Documents of Ji-Gong, and Current Internal & External Research) 『三大和尚研究論文集』 I, 1996, 佛泉, pp. 51-69
- (1997) 同 『高麗로 옮긴 印度의 등불——指空禪賢—— (The Light of Indian Buddhism Transformed in Medieval Korea)』 一潮閣, 1997, pp. 1-136
- (2000) 同 「指空研究의 擴散과 争点——韓中學術會議의 最近의 研究成果——」 『伽山學報』 12, 가산학회, 2000, 『韓國仏敎敎學叢書』 佛函出版社, 2004, 123卷, pp. 243-262
- 資料集(1997) 『해인사 금동비로자나불 복장유물의 연구 (海印寺金銅毘盧遮那佛腹藏遺物의 研究)』 聖寶學術叢書 1, 성보문화재단연구원, 1997

## 注

- 1) 任京美(圓映) 『印仏學』 第54卷第1号, pp. 512-509(41-44)
- 2) 無生の原語は anutpanna で, その語義には, 不生, 無生, 未生, 非生, 未起などの意味が含まれている。現状の面からそれを超越する究極の状態を含める意味を持つ。簡単にいえば, 無生は生滅のない涅槃, 即ち無生法忍のことである。また, 無生の無は, 否定ではなく, 無為の意味で意識以前の絶対事実を指す。

- 3) 「無生戒牒」には4つがある。「妙徳戒牒」は優婆夷妙徳に、「懶翁戒牒」は懶翁に授けた戒牒であり、「瑚林本戒牒」は瑚林博物館に保存されている戒牒である。「瑚林本戒牒」は『圓覺經』、『六相壇經』の後ろに付け加えられている。「覺慶戒牒」は本稿で紹介する海印寺の戒牒であり、完全な形で保存されている。
- 4) Lee, Boung-Wook(1996:15-49)
- 5) 河廷龍(1996:71-99)
- 6) 金炯佑(1984:1-24) 許興植(1985:25-39), 許興植(1988:39-86), 許興植(1989:87-118), 許興植(1990:119-142), 許興植(1991:143-154), 許興植(1991:155-174), 許興植(1993:175-190), 祁慶富(1996:193-227), 許興植(1996:227-242), 許興植(2000:243-262), ほとんど許興植の論文である。
- 7) Han, Sung-Ja(2001:11-35)
- 8) Han, Sung-Ja(2002:155-187)
- 9) 【韓中學術大会】は、1997年8月10日より韓国曹溪宗総務院と中国雲南省社会科学院が共同で、九日間開催した学会である。場所は昆明である。『中韓・韓中指空研究學術討論會資料集』楊學政主編, 1997年11月
- 10) 翻訳された論文は、段玉明(2001)と張福(2001)がある。
- 11) 碑文によれば、指空の入寂は1361年11月29日である。碑文を詳細に判読すると、指空は1235年生まれ、126歳に入寂した事になる。しかし、これは信じ難いものの、学界では認められていない。『禪学大辞典』では指空の生没年代を1289-1361年としている。『禪学大辞典』p. 680, 今のところ明確な情報はない。
- 12) T51.983a
- 13) ところが、指空がインドで生まれ、ナーランダで修学したことについて、疑問を抱いた論文がある。それによると、指空が生存していた13, 14世紀のインドは、すでに仏教が衰退していたため、ナーランダも廃墟となっていたという。その故、指空がインド僧であったことには、疑問が残ると指摘している。金炯佑(1984:1-24)
- 14) 中国の行跡については、祁慶富(1996)を参照。
- 15) 師以是年。四月下旬。還自彼山。因受壇越順。順妃之請。住錫干城東崇壽寺。與其門弟及諸山精納之願赴者。約為一夏安禪。於寺之西南高來處。別作戒場。依最上無生戒法。大開甘露之門。於是自王親戚里。公卿大夫。士遮人。乃至愚婦。爭先雲集。於戒場者。日以千萬計。凡得聞一言一話者。如得無價寶珠。「指空禪要録序」
- 16) 『高麗史』卷35, 忠肅王15年7月, 「庚寅 胡僧指空 說戒於延福亭 士女奔走以聽 雞林府司録李光順 亦受無生戒 之任令州民 祭城隍 不得用肉 禁民畜豚 甚嚴 州人一日盡殺其豚」
- 17) 資料集(1997)
- 18) 懶翁受戒の変相図に類似する。そこにも帽子を被って授戒する指空の姿がある。資料集(1997:52-53)
- 19) 許興植は、この戒牒の持ち主が死んだ後、彼の子孫がそれを腹藏に入れた可能

性が高いと推測している。しかし、現代においても仏像の腹藏品は生きている信者の布施を貰って入れるので、許教授の予想には疑問が残る。また、許教授は「無生戒牒」に名前が残っている覺慶が僧侶であると指摘する。許興植(1997:1-136)

- 20) Han, Sung-Ja(2002:155-187)
- 21) 復次金剛手菩薩摩訶薩。受此文殊師利菩薩摩訶薩。無生戒者。應當志心。敬愛四攝依法。何等為四。一者。婦依佛無形。二者。婦依法無生。三者。婦依僧無諍。四者。婦依最上無生戒。……省略……復次金剛手菩薩摩訶薩。受此文殊師利菩薩摩訶薩。無生戒者。應當志心。懺除三業罪。本源清淨道。為迷無所知。造罪無邊量。受此煩惱身。我今求哀懺。早證佛菩薩。復次金剛手菩薩摩訶薩。受此文殊師利菩薩摩訶薩。無生戒者。應當志心。擔發六大願。一者。一切衆生未先成佛道。我不登心覺。二者。一切衆生所有諸煩惱。我悉皆代受。三者。一切衆生所有諸昏愚。悉令得明智。四者。一切衆生所有諸災難。普令得安穩。五者。一切衆生所有貪嗔癡。令得戒安慧。六者。一切衆生同入大願海。俱成等正覺。復次金剛手菩薩摩訶薩。應當志心。受持無生戒。無生戒者。衆善不修。諸惡莫造。善男子。此戒法者。情解俱泯。境智雙忘。體絕偏圓。性無動搖。非證非修。非持非犯。不真不妄。不取不捨。金剛堅固。海印發光。體寂周圓。真常覺湛。『文殊師利菩薩最上乘無生戒經』卷下
- 22) 中島志郎と이병욱 (Lee, Boung-Wook) は、指空の禅思想が『六祖壇經』と一致していると指摘する。中島志郎(1984), Lee, Boung-Wook(1996:15-49)
- 23) 柳田聖山は、婦依自三身仏を無相戒受戒儀の特徴とし、一般的な三身仏(法身・報身・化身)の順番が異なっていることを指摘する。柳田聖山「大乘戒經としての六祖壇經」『印仏学』12-2号, 1964, pp. 65-72.
- 24) 無相懺悔の懺は、今まで犯した罪や悪業を反省することであり、悔は未来の悪業をあらかじめ悔いることである。
- 25) 『梵網經』T24.1006c.
- 26) 『慧能研究』駒沢大学禅宗史研究会編著, 大修館書店, 1978, pp. 288-289.
- 27) 無生戒者, 是諸世尊一切如来, 無生法忍
- 28) 『諸法無行經』卷上, 鳩摩羅什訳, 410-412成立, T15.750a-761b, また、『諸法無行經』の別訳『諸法本無經』(闍那崛多訳)もある。
- 29) 淨威儀菩薩が、衆生教化のため戒律を破ることとなった。それを非難した者が、地獄に落ちるといふものがたりである。T15.750a
- 30) T15.750b
- 31) 若し菩薩が一切衆生, すなわち(衆生の)涅槃性を見ると, 必ず業障の罪は無くなる。T15.753c
- 32) 一切の善不善法を見ることは虚誑不實のことであり, 幻のように, 夢のように, 影のように, 響のように, 焰のようである。T15.754a
- 33) 師云, 於此戒中, 無凡無聖, 非性非相, 非有非無, 亦非身心, 亦非善惡, 此則是戒。……師云, 若修善者則受人天之果也。若作惡者則墮輪迴之報也。是故善惡

二途非是道法之實理也。……【禪要録】

- 34) 이같이 고려후기의 불교계는 이미 상당한 문제점을 안고 있었다. 따라서, 이 시기에는 불교의 정치적영향력은 물론, 종교신앙으로서의 역할도 자연스럽게 축소되었다. 그러나, 수선사, 백련사등의 신앙결사를 비롯한 현실극복의 노력이 꾸준하게 이어졌다. 당시의 고승 대덕들은 어려운 시기를 이겨나갈 수 있는 새로운 사상을 강조하였고, 이것을 재가신자들이 수용하면서 문제점을 풀어나갔던 것이다. 鄭濟奎『高麗後期在家佛教信仰研究』檀國大學校大學院 史學科 博士學位論文, 2000, p. 14